

The Sad Fortunes of the Reverend Amos Barton
George Eliot の小説における gossip, rumor の働きについて (4)

The Sad Fortunes of the Reverend Amos Barton
On the Functions of gossip and rumor in the novels
by George Eliot (4)

嶋田 貴美子
Shimada Kimiko

キーワード : gossip, rumor, Evangelicalism, realism, humor, pathos, sympathy, community

(16)

George Eliot が小説の執筆において自国の世界的に偉大な文学者である Shakespeare に多かれ少なかれ影響を受けていた⁽¹⁾ことは彼女の小説の中に Shakespeare 劇からの引用がしばしば見られることから明らかであるが、当学紀要 28 号⁽²⁾の同 title の chap.14 ~ 15 で述べた、*Amos Barton* の小説の第一章におけるこの小説の主人公である Barton 牧師の、第三者による gossip, rumor という形での小説への登場の仕方は、第一幕第一場で第三者が吐露する主人公への jealousy や憎しみや予言の中に主人公の運命が暗示される Shakespeare 劇の運び⁽³⁾とかなり似通ったものである。Shakespeare の劇ではそれ故、第一幕第一場はその劇の結末を暗示する最も重要なものとなっているのであるが、George Eliot の小説も多くの場合、劇で言えば第一幕第一場に当たる第一章の最初の場面、つまり当論文がかかわっている *Amos Barton* の小説においてはすでに紀要 28 号の同論文の chap.15 でみてきたとおり Shepperton や Milby などの近隣の町のそれぞれの社会的な rank を代弁する 5 人の人々の集まりの中にきかれる gossip あるいは rumor という形での public opinion に、この小説の主人公である *Amos Barton* 牧師の多角的な見地から見られた姿が紹介され、そしてその中に小説の theme である Barton 氏の sad fortunes の暗示が込められているのであって、この 5 人が集っているその Cross 農場の Patten 夫人の所でのお茶会の場面、それにまた George Eliot の小説における gossip, rumor の働きの集大成ともいえるべき *Middlemarch* の広義の意味での冒頭部の、それぞれの社会的な rank を代弁する人々の中にきかれる gossip や rumor の中で、Dorothea 本人ばかりか Dorothea と双壁

をなすもう一人の主人公とも言える青年医師 Lydgate が初めてこの膨大な小説に登場し、そしてその中に彼の来たるべき運命の暗示⁽⁴⁾が成されている Dorothea の婚約披露 party の場面に、Shakespeare 劇の第一幕第一場と同じほどの重要性が置かれているのを見るのである。このように Shakespeare の劇と George Eliot の小説は共にこうした gossip や scandal や予言が極めて重要な働きをするという文学上の類似は認められるがしかし、それらの本質的な性格については双方で大分異なり、Shakespeare がそれらを主人公に対する個人的な憎悪や jealousy に基づく報復の暗示として、また恐ろしい殺戮に対する運命的な予言として用いているのに対して、George Eliot の小説におけるそれらは、もちろん主人公に対する憎悪や jealousy に根拠を持つものは多いがさらにそれらはそこに留まることなく個人的な感情を脱却して主人公が取り込まれている外的社会であるその地域共同体の public opinion となり、その共同体の中においてこそ主人公を圧しているその主人公の持つ特異な dilemma の何たるかをその人々の話の中で浮き彫りにする働きを持つのである。

当時はまだ Marian と名乗っていた George Eliot が non-fiction の分野での文学活動をやめ fiction の分野で成功の確信を得ることになったこの *Amos Barton* は彼女の労苦の末に生まれたものではなく、*Amos Barton* を執筆するに到った動機もまさに偶発的なものであったことを思えば小説家としての彼女の潜在的な素養の深さを知るのである。つまり 1856 年のある朝彼女は「ベッドに横になりながら彼女の最初の小説の主題を何にしようかとつらつら考えていた時、そのまどろみの中にこの小説の全容が浮かんできたのだ。その中で彼女は遠い自分の過去、つまり幼少期を過ごした Chilvers Cotton の教会の様やその牧師の悲しい運命に立ち返ったのである⁽⁵⁾」。彼女はそのときの思いそのままに *Amos Barton* の中で 1830 年代初期の「Covertry の田舎の人々の生活の場面を生き生きとそして情感豊かに描き出そうとし⁽⁶⁾」たのであった。また *Amos Barton* の執筆について彼女は友人である Mary Sibree への手紙の中で「部分的には私の性格的な欠陥から、それと他の対外的な事柄から、過去に私が受けてきたすべての過酷な苦しみがずっと先私が死ぬことになるその時までの間に私が携わることになったこの特別な仕事の準備をしていたのだと思います⁽⁷⁾」と書いているように、この *Amos Barton* は *Middlemarch* と共に Coventry の provincial life の克明な描写の中で展開されている小説であるばかりか、当学紀要 25 号⁽⁸⁾と 27 号⁽⁹⁾の当論文の中で詳細に見てきた Marian 自身のそれまでの生涯の精神の遍歴から得られた人間への鋭い観察とその内面の洞察力の鋭さによって独自の世界観人間観を展開する小説でもあるのである。

当時はすでに George Eliot は France の哲学者 Comte⁽¹⁰⁾の説く「人類は総体であり個人は一部分である。したがって個人はあらゆる意味において全体である人類に服従すべきものであり、己を殺して他人に生きるのがわれわれの最上の道德である⁽¹¹⁾」という実証哲学に大いに共鳴していて、また *Felix Holt*⁽¹²⁾の中で自ら「より広い公的生活によって規定されない個人的生活はあり得ない⁽¹³⁾」と言っていることからわかるように、George Eliot の小説はある一定の opinion を持った公人とその opinion に抵触する特殊な条件下にある私人との相克の drama である。このような George Eliot の小説に共通した構造上の特性を Joan Bennet は「内部集団 (道徳的 Dilemma

に陥った少数の人々の集団) とそれを取り巻く外界 (その dilemma がそこで解決されるべき社会⁴⁴⁾) として総括するが、内部集団の dilemma もそれに作用する社会の opinion も時代的なまた政治的な状況の変化により柔軟に変容していくものであって、そしてまた inner circle の dilemma は outer circle の中で解決されて行くうちに徐々にお互いが新たに変容を遂げていくという人の世のからくりには作者は着目しているのである。したがって George Eliot が自分のほとんどの小説の時代背景を遠い過去に置いていることの一理由の一つには、30 年なり 50 年たった後に執筆当時の世の中その間の変容の結果を見ている作者の観念の中ではるか過去の記憶の底に沈んでいる inner circle の dilemma も当時の outer circle の実態もより客観性を持つことができるのであり、そしてまたそうした相克を作り出した人間の本质についてもそこに付随した人の悲しみについても、そのただ中であっては極めて得ることがむずかしい客観的な視点を得ることができるという、彼女が fiction の中で成そうと意図した目的を達成するための優位性があるからなのである。そしてその優位性を徹底させるために George Eliot は自分が書こうとする小説の背景を成す主にその時代の地域共同体の人々の生活様式や道徳意識などの綿密な調査を行い outer circle の形態を鮮明に描き出すことによりその中での inner circle の dilemma の深さを極立たせるのである。

community 総体としての outer circle と小グループである inner circle との相克は、まずその community の正義や道徳に対する独特な概念と価値感とがある一定の規範となり、それを多角的な見地から伝える gossip, rumor, scandal という陰湿な、しかしのっぴきならない力が、そうした村の規範に抵触する inner circle の少数の人々を攻撃することから始まる。それゆえ inner circle にある者は、*Adam Bede* 中の Hetty や Arthur のように土着の者である場合もあるにはあるけれども、応々にして堅固な村の規範を知らないよそからの移住者である場合が多い。そしてその gossip や rumor や scandal のようないわゆる作者が言うところの「当人のいない所で行なわれる evil speaking」は先に記したようにそれを口にした個人を離れ community 総体の代弁となって inner circle を成す少数の者達を疎外し追いつめていく大きな力になるのである。

当学紀要 28 号の同 title の論文の chap.12 ですでに述べたとおり、*Amos Barton* の時代的背景となっている 1830 年代初期においては特に商工業の盛んな都市部では Industrial Revolution による総合的な社会形態の変化や極立ってきた貧富の差などによってそれまでの農業中心の英国社会に波及していた価値感が崩れ、政治的社会的かつ宗教的な変革が一挙に噴出した時代であった。Industrial Revolution とその変革の波が *Amos Barton* の地域的背景である実際の Covertry の田舎町にどの程度及んでいたかということについては、John Prest の *The Industrial Revolution in Covertry*⁴⁵⁾ に詳細に述べられている。Prest はその本の中で George Eliot の小説の中でも *Amos Barton* と共にそこに極立って Covertry を映しとっている *Middlemarch* について George Eliot のその地域的背景の取り扱い方の優秀性とそこに現われている地域共同体の状態を述べているのであるが、それはすなわち *Amos Barton* と *Amos Barton* の小説の舞台である Shepperton の記述とも重なるものである。

その小説は歴史的に見ても正確なもので、当時の特に異なった身分にある者たちの差異がきちんと認識されており、またその単一社会の中にそれら異なった階層にある者たちを今だなお統合しているものが正確にとらえられているのである。…地方の村と町との関係が、一方では村の機織りとむさ苦しさを描きつつ他方で村の中にある農業と繁栄とを描きながら、生き生きと描写されているのである。中でもとりわけ George Eliot は彼女の哲学をもってして、人々が互いの罪のために苦しみに陥ってしまう様子を克明に見つめて、古来からの地方の田舎町の中における行為の規範を決定する地域の人々の見解の名状しがたい動向を発見し、記述する力はまさに申し分がない。¹⁶⁾

George Eliot が小説を執筆する際、好んで遠い過去に時代背景を置いたことに対する理由についてはこの論文の chap.16 でも見てきたことであるが、それも特に作者が 10 歳ほどの少女で幸せの絶頂期を過ごした 1830 年前後の Covertry をそこに彷彿とさせている小説が多いことについては彼女が、「子供時代というのは後でじっくり回想する時には常に美しく幸せなだけのものであるが、その当座にある子供自身にとっては何だか意味もよくわからない深い悲しみに満ちているものなのだ¹⁷⁾」と 23 歳の時に述懐していることから推察されるようにそれは、子供の時に身の周りに確かにあったにもかかわらず、当時は何だか訳がわからなかった悲しみ、つまり大人になった今でこそ推し測ることができる人間の持つ哀感 (pathos) と、それへの sympathy とを読者の側に喚起させようという、彼女の fiction における目的を達成するための最も格好な方策であったからであろう。そしてまた George Eliot が彼女の最初の小説である *Amos Barton* から最後から 2 番目の *Middlemarch* に到るまでのほとんどすべての作品において当時の人々を克明に描写することによって描き出されたイギリスの過去の農村に懸命に生きる人々の持つ pathos と sympathy とを小説執筆の基軸に置いているのは、George Eliot が文学活動を活発に行なっていた 1850 年代初期においては実際の人間の生活の克明な記述に小説の真実を求めるという realism が George Eliot も含む *Westminster Review*¹⁸⁾ の批評家達が用いた主要な裁定の基準であるにはあったが、それにもましてそれは George Eliot がさらに 'low and rustic life' の中にある pathos と sympathy に主題を置く Wordsworth¹⁹⁾ の realism に心酔していたことによる極めて自然な成り行きでもあったのである。その realism と Virgil²⁰⁾ からの文学的な影響も手伝って²¹⁾ George Eliot は、先に引用した Prest の言葉にあるような、「苦しみに陥ってしまう」人々と「古来からの地方の田舎町の中における行為の規範を決定する地域の人々の見解」との間の確執を、当時の地域共同体を構成している煩雑な「異なった身分にある者たちの差異がきちんと認識された」上でのその立場を代弁する gossip, rumor、それに scandal とその渦中に陥った者の苦しみを詳細に描き出すことによって人間の荘大なドラマを展開するのである。

(17)

Amos Barton の主人公である Evangelicalism²²⁾ の Barton 牧師に対する public opinion の中に見られる批判については当学紀要 28 号の chap.15 ですで見えてきたように、牧師としての彼の

職業上のものと彼の性格に対するものとの二つに分けることができる。英国国教会に精神生活の基本を置き古来からの整然とした行為の規範を持った Shepperton のような古い地方の田舎町であってもその Evangelicalism の牧師が Mr. Hackit が言うように説教がうまければ、たとえその教義が常に十分に村人の中に受け入れられるということは望めないとしても時には村人たちの心をとらえることもできたのであるが、Barton 牧師は Cambridge 大学出身者²³の学者肌で学術的な力はあったが²⁴、説教はまとまりがなく、精神生活においては至って低い level にあった²⁵当時の Shepperton の教区牧師として「車大工でもかじ屋でも理解できるような説教をする」評判のよい Ely 牧師のような、彼らを導いていく天性の能力に欠けていたのであった。住民と教区牧師とが正面から向き合うことになる日曜礼拝の仕様についても Barton 牧師は住民の思いには全く配慮を欠き dogmatic に押し進めその上癩癩持ちで、自らは牧師としての職業をこよなく愛しながらも殷勤さとやさしさ、上品さに欠け、貴族的で優雅でゆったりとしていたそれまでの国教会牧師とはかけ離れて、土着の人々が嫌悪する家柄の悪さと貧しさの香りの高い牧師であったのである。つまり「古い秩序がまだ保たれていて、さまざまな階級のまたさまざまな状況にある人々が一つの均一な社会に住んでいた²⁶」Covertry の異名である Shepperton において、Amos Barton 氏は紀要 28 号ですすでに見てきたとおりその社会に入り込んできてもはや二年が経つとは言えその地域にはまだまだ慣染めない stranger で常に批判の波にさらされている異端的な立場に追い込まれている牧師だったのである。

しかし真相は人の目から隠されているとはいえ、自らが実際に犯したもはや取り返しのつかない罪を核に擁した激しい gossip や scandal の矢面に立たされ、その地域共同体からはじき出されていく *Adam Bede* の Hetty Sorrel や *Mill on the Floss* の Maggie Tuliver やまた *Middlemarch* の Bulstrode などとは異なって、Barton 氏自身はそのような道徳上の罪からは潔白であるのにもかかわらず、上に記したような「洗練された高教会²⁶の鼻には」不快感を与える「低教会²⁶の葱の匂い²⁷」を持つ Barton 氏への反感が彼への gossip そしてついには女性 scandal までも生むことになったのであり、客観的な立場に立って判断することができる読者の側からすれば、先に述べた他の小説群のもののようなその中に隠された真実の暗示のある gossip や scandal に比べたら Barton 牧師のものは極めて不当なものであったと言わざるを得ないであろう。その分 Barton 氏への gossip, scandal は迫真性に乏しいがしかし、上記の他の小説の中で実際に自ら犯した道徳上の罪を地域の中に湧き上がった gossip, rumor でじわりじわりと叫弾されていくことに脅える者たちに対する sympathy には George Eliot が言うところの Nemesis の概念が入り混じりより深くそしてより複雑な情感を読み手の側に喚起し、それ自体が独自の展開をするのに対して、潔白であるのに彼らと同じほどの激しい gossip や scandal の渦に巻き込まれた Barton 氏に読み手である我々は純粋な深い sympathy を感じると共に彼の善良な天性に対して下されたそのような社会的批判に彼の運命的な人生の悲哀 (sadness) を感じるのである。このような gossip, rumor の取り扱い方は、後の *Silas Marner* 中の Raveloe 村において主人公の Silas が被った evil speaking に相通じるものであって、もう一方の自分の中に隠された罪の意識を持ちあるいは旧弊を脱し新しい思考様式に向かわんとする異端的な者たちが evil speaking によってそ

の地域共同体を去ることによってしかその解決が得られないのとは異なり、Barton 氏に限っては Shepperton の村落共同体以外のところにその禍根を残したとはいえ、Barton 氏と Silas に対する evil speaking は共にふとした運命の綾で村人達との信頼関係が回復される可能性を多分に含んだものなのであった。村人たちとの信頼を回復する運命の綾は、Silas に対しては Silas の cottage に入ってきた赤子といういかにも明るい前途を予想させるものであったのに比べて Barton 氏の場合は何とはるかな、そして悲劇的なものであったであろうか。

当学紀要 28 号の当論文の chap.15²⁸⁾で引用した Cross 農場の Patten 夫人のところでのお茶会の席でのそれぞれの者の発言から明らかであるように、Shepperton の教区民の中における Barton 牧師への反発に対する目下最大の原因は、すべてに生真面目で融通のきかない Barton 氏の性格と、それにむずかしく徹底した彼の Evangelicalism にあった。しかし紀要 28 号の同論文の chap.15 の引用文からもわかるように Shepperton の村の多くの者達は Barton 氏の dogmatic なやり方には大なり小なり腹をたてながらもその新しい宗教に対しては時代の変遷上やむを得ないことであることを密かに感じ、その新しい教義を受け入れる用意があることがそこに読みとれるのである。しかしこの Patten 夫人のところ集っている者のうち Patten 夫人当人の Barton 氏への憎悪は他の者達の批判とは少し異質なものを持っている。それは Patten 夫人がその中で唯一人生粋の Shepperton の民であり、誰の情にすがることなく生活していられる極めて富裕な 80 歳の老人であるという彼女の立場ゆえのものであろう。そのような Patten 夫人が Barton 氏を憎悪する理由はまず一つには彼女が Barton 氏の前任者であった国教会の Gilfil 牧師を敬愛しそして彼の在任していた頃にとっても強い nostalgia を感じているということ、つまり Patten 老夫人の中に今だなお強く息付き、そして彼女を慰め続けているのは *Amos Barton* の次の小説である *Mr. Gilfil's Love-Story* の中に見られるように「高邁な教理や論争を巻き起こす問題を提起するようなものではな²⁹⁾」く、「多分強く良心に訴えるというものでもな」く、また「Shepperton の村人達の知力に決して無理な強要をするものでもな」かった Gilfil 氏の説教が、「目新しさではなく繰り返し²⁹⁾」が「最大限の効力を発揮²⁹⁾」していた当時のその村の人々の心をしっかりととらえ、貧しさも目立たず美しいもの優雅なもの上品なもので満ちあふれて穏やかに打ち過ぎていた良かりし頃の田園生活への強い nostalgia なのである。そして Patten 夫人が Barton 氏を憎悪するもう一つの理由は時代の変遷をある程度受け入れようという気構えのある Hackit 氏が強い Heathenism を認めたような、新しいものをかたくなに拒否しようとする老人特有の保守性と、Patten 夫人の個人の「聖なる Christianity³⁰⁾」を疑うような見解であった。Patten 夫人は Barton 牧師が Patten 夫人を最近訪問した折りに、紀要 27 号の chap.12 での引用にあるように「あなたはこのあなたの富の一人の管財人に過ぎないのだから、神の栄光を称えるためには Shepperton 教会の再建に向けて多額の寄付金を差し出すのが一番いいのではないかと行って彼女が約束していた 20 ポンドの寄付金の増額を迫った³¹⁾」ことを根に思っていたのである。20 ポンドという金額が当時どれほどの価値を持っていたかということについては、Barton 牧師の年奉が 80 ポンドであったことから考えれば寄付としたらかなり多額に見えるけれども、教会に家紋のある内陣が備えられていることや、今は救貧院にいる Fitchett とい

う男がかつてはそこで従僕をしていたことを誇っていることから推察すれば地主以上の身分があるものと推察される Ordenport 氏が、Barton 一家の家計が逼迫すると 20 ポンドを気軽に都合し、さらにこの小説の最後の方で Milly が死んで悲しみに打ちひしがれている Barton 氏を励ますために Ordenport 氏はお悔やみとして 20 ポンドを送ったのだし、また Cleves 牧師はその折にも裕福な牧師仲間から 30 ポンドを集め自らの 20 ポンドを加えて Barton 牧師に送っていることから推察すれば、今現在 50 歳になるのに独り者で老齢の Patten 夫人の世話に明け暮れている姪の Gibbs 嬢に対して、「莫大な私の財産をあてにしているがその手にはのるものか。この財産は夫の遠縁の者にそっくり渡すのだ³²⁾」と意地悪なことを企んでいるような Patten 夫人の、教会の再建という特別な目的に対する寄付金としてのその 20 ポンドという額は Barton 牧師でなくても、例えば「教区牧師のためならいつでもただで荷台一杯の石炭を馬で引かせて届けて³³⁾」おりいつも何くれとなく Barton 氏一家を援助しそして Barton 牧師が提唱した新教会の再建のための資金集めに奔走している Hackit 氏でも異議を唱えたいところであったであろう。さらに「貧乏人であろうが金持であろうが教区民のすべての魂の救済を旨とし³⁴⁾」、貧しく文化の香りもしない荒れた生活をしている救貧院の炭坑夫よりも年収はかなり低いにもかかわらずそうした所での無報酬の説教に甘んじていて金銭的な欲望から解き放たれていた Barton 氏の基準からすれば、「これまで夫を崇拜してきたが今ではその持てる富を崇拜し³⁵⁾」それにしがみついている Patten 夫人の態度は、れっきとした道德上の罪であると認められたに違いない。ところがそのように思ったことをはっきりと口に出す Barton 牧師の言葉は、英国国教会 (Anglican church) の Gilfil 牧師の、教義というよりも耳慣れて親わしい「歌の調べ³⁶⁾」のような説教の下では感じなかった不安を Patten 夫人に感じさせたのであった。この Patten 夫人の Barton 牧師への evil speaking もまた、Shepperton の彼女と同様の rank にある者たちの代弁であるとすれば、Shepperton の村が古くからの村落共同体であることから Barton 牧師に対して Patten 夫人と多かれ少なかれ同様な考え方をしている層、または完全に Patten 夫人と同じ思いを持っていなくてもつまり「洗練された高教会」に対する憧憬を心の内から捨て去ることができない層がかなり厚かったということができるであろう。

しかしそのような層は Patten 夫人と同様な高齢者が多かったことと、Shepperton が近隣の町に比べたら文化的水準がはるかに高く³⁷⁾ 貧しい労働者の流入も多くあってある程度の開放的な考え方が育っていたこと等々の理由で、Patten 夫人の言葉の中に見るような Barton 牧師を断固拒否するような構えは、足かけ 50 年もの長きにわたって今だなお教区牧師の任にあり自らが 80 歳という高齢ではあるが教区民からは殊の外愛され親われ尊敬されている Anglican Church の牧師 Crew 翁がいる Milby にやって来た Evangelicalism の Tryan 牧師に対する排斥運動のような大きな騒ぎに発展することはなかったのである。

それにもかかわらず Shepperton の教区民の間で Barton 牧師に対する反感が根強かったのは先にも述べたように Barton 氏の周りに漂う強い低教会の雰囲気であり、また人間的な欠陥であった。Barton 氏は地方の Dissent の教会の執事の息子であり、ほとんどが貴族の家系の出身でいかにも貴族の出らしい洗練された優雅さを持っていた国教会牧師に比べて、齢まだ 40 歳ほ

どであるのに歯が抜け頭は禿げ上がっている上に痩せてひょろりと背が高い貧相な風貌にも下卑た言葉使いにも、そしてまた日常の何気ない素振りにも品がなく、また当時の田舎の人々にとっては完璧な雲上人とも思われていた「Cambridge や Oxford 大学の出身者である聖職者には珍しく正確な綴字法や統語法に疎い⁹⁸⁾」こと、そして当論文の chap.17 でも見たように教区民の魂を導く牧師としての「天性の能力」に欠けていたことのすべてが Barton 氏の教区牧師としての権威を失墜させ村人の中に尊敬の気持をかき立てることに失敗しているばかりか逆に人間的な不審感を抱かれる存在に身を置く境遇を自ら作り出していたのである。つまり Barton 氏は Lewes が言う「神学的な」立場にありながらいわゆる失敗だらけの “human” であったのだ⁹⁹⁾。その humanity は Mrs Hackit が Barton 氏が癩癩持ちであることに対して「彼は私と同じだ」と言っている⁴⁰⁾ように *Adam Bede*⁴¹⁾に登場する人間的にも説教師としても完璧である Methodist⁴²⁾の Dinah Morris に比べれば、彼はその欠点ゆえにいかにも人間らしい pathos を持った人であって、牧師であるというその立場だけに意気を感じて会衆の心をとらえることができようができまいが自分の意識の中でのみ真摯に牧師職にいそしんでいる Barton 氏には、その雰囲気嫌いだというこのためだけで Shepperton の地域共同体が一丸となって彼を村から追いたてべき理由は何も見い出せなかったのである。以前の国教会牧師のほとんどが貴族の出身であり bandana と brown leggings が身体的特徴であった *Felix Holt* 中の Rector Lingan のように looks に気を使うゆとりのあった国教会の教区牧師とは異なり、冬のコートもなく雪の中を寒さに震えながら説教のために歩き回る Evangelical の Barton 氏に対して、「貧困は自らの悪徳の印」と考える考え方がまだ抜け切れていない Patten 夫人のような層にある者はともかくも、Shepperton の中にも sympathy を感じる者が徐々に現われてきたのである。さらに Barton 氏の疎外されたこの立場の緊張感を和らげることができたのは、夫 Barton 氏の誰も驚くほどの少ない年奉⁴³⁾の中で体があまり丈夫でないのも顧みることなく教区牧師としての夫の立場を支援し、6人の子供を身ざれいにさせさらに近々もう一人の出産を控えている妻の Milly の存在であった。

(18)

Patten 夫人のところに集う人々の Barton 氏への evil speaking は Hackit 夫人の「私は Barton さんが好きですよ。…とてもいい人だと思います⁴⁴⁾」という言葉によって急激に勢いを失ない、相変らず Patten 夫人のような層に批判の強い Barton 氏が行なっている教会以外のところでの説教、つまり貧しい農家で夜間に行なう説教についても「めったに教会に来たこともない農場労働者や靴下職人達」がそこに出席することは、「何もしないでいるより良いことである⁴⁴⁾」という結論に達するのである。

小冊子頒布会 (Track Society) や、そのような貧しい農家や救貧院 (workhouse) での説教にしても Barton 牧師が精力的に行なっている牧師としての宗教活動は、一方で「まだ古い秩序が保たれている」ものの他方では社会変化が激化している Shepperton の社会的な状況の必要性か

ら徐々に認められてきはしたが、しかし Barton 牧師の弁術の才は「賞讃に価する意図を持ちながらも結局は大したものではないものとして終らせて」しまうような貧しいものであって、その上彼は説教の最中で「しばしば正しい方向を見失ってしまいあげくの果てはいささか腹をたてることになっ⁽⁴⁵⁾」てしまうのであった。彼の説教のこのようなありさまはこうした自発的な private の集会でも日曜礼拝のような public の礼拝時でもほぼ同じように推移したことから判断すれば説教を旨とする教区牧師としての Barton 氏の才能の乏しさはもはや疑うべくもないが、当時の社会の次のような条件がまた彼のその才能の乏しさを極立たせているのである。

救貧院の方角に向かう道路は石炭粉で黒々とし、れんがの家は煙ですすけている。その時代、つまり機織り職人のその時代には、小さな家々の窓辺には一軒おきに織機が置いてあって、そこには病に犯されているのではないかと思われるような男や女が薄い胸を台に押しつけて足と腕で踏み車を踏むのと大して変らないような仕事をしているのが見られたことであろう。……農場労働者の粗野な愚鈍さに加えて炭坑夫たちはいかんともしがたい獣性を、また織子たちは激しい急進主義 (Radicalism) と非国教会主義 (Dissent) を持ち込んでいたのである。実際炭坑夫たちは Barton 氏よりもたくさんの賃金を稼いでいる者も多かったが hackit 夫人がよく言っていたように「まるで滅びく獣のように何もせず浴びるほど酒を飲みたばこをふかしてただ時を過しているのがあった。Amos 氏の前任者の Parry 氏の評判のよい説教によってかなり高まっていた宗教的興奮はほとんど消え失せて Shepperton 村の宗教的生活は低い水準へと落ち込みつつあったのだ。ここは…Satan のひどい拠点であった…⁽⁴⁶⁾

George Eliot は、そのような者達で占められている救貧院に於ける Barton 牧師の説教の会衆に「この救貧院の院長である Spratt 氏がしばしば怒りを爆発させながら監視している強情な何人かの子供をつけ加えてみて下さい…ほんの一握りしか理解してもらえないそのような公衆を相手に福音を説かねばならないとなると大学教育を受けた聖職者の仕事もかなり過酷なものであるということがおわかりいただけると思う⁽⁴⁷⁾」と彼女自身の見解を述べているが、Barton 氏自身はこうした人達に対しても自身の説教の構えを変えることがなく、彼の心は Oxford 大学という最高学府出身であるという pride と自信にあふれ、加えて持ち前の学究的な資質と生真面目さで高邁な説教をしようという気概が強く、また「『魂の救済 (“cure of soul”)』を牧師の仕事以上のものとして考え⁽⁴⁸⁾」ていたのであって、そういう牧師にとっては上記のような頭が全く「空っぽの状態⁽⁴⁹⁾」で何の考えも形成されていないような救貧院の会衆を前にしての説教は想像以上に骨の折れるものであった。

このような牧師と会衆の level の gap を埋め、牧師が自分の持てる明析な頭脳にはっきりと刻まれている教義を説教し成功させる要因は牧師の側の「柔軟な想像力」と「巧妙な弁舌の才」であると George Eliot は述べているが、そのどちらの才能も Barton 氏には生まれつき備わっていないとなれば、彼の説く「Christian doctrine」が、もはや「枯れしぼんでしまっている」それらのほとんど 0 に近い level の会衆の魂に「喜ばしい露となってしみこんでいく⁽⁴⁹⁾」などということは明らかに期待することはできない。その点について George Eliot は現実の Shepperton の community の一員である level から一段越えた傍観者としての高みから、「間違っただけの場所に身を置いている価値のある人の哀れさよ。彼の価値を認め彼を哀れむことのできる者

そしてまた間違いだらけで不十分な結果に終わろうともその目的の誠意を認めてそれを愛する者こそ寛大な心の持主というものだ⁶⁰と総括するのである。つまり Barton 牧師の sad fortunes は、Dissent の教会の腕の立つ家具職人兼執筆であった父の仕事を継承しそこに留まることを止めて、Oxford 大学に行き牧師になることを決意したその時点からすでに始まっていたのであった。

そうした Barton 氏の教区牧師としての才能の欠如もまた Shepperton の public opinion としての彼への evil speaking も、究極的には *Adam Bede* の Adam と同様に融通のきかない頑固者であったという彼の性格的な欠陥に帰するものであったのである。Patten 夫人のお茶会の席で真先に gossip の種になった日曜礼拝の時の聖歌と聖歌隊に対する dogmatic な制止についても Barton 氏自身 Barton 氏のやり方に賛同している Czerlaski 伯爵夫人に、「新しい合唱隊を作りましたよ。…以前からの歌手連は解散させることに決心ができましたので。彼らが結婚祝歌などとよんでいるあんな歌は二度と歌っちゃいけないと命令してあったのにそれに盾ついて歌ったのです。礼拝中に牧師に反対の声をあげたのですからもし私がそうしようと思えば宗教裁判に彼らを訴えてやることもできたのです⁶¹」と言っているように、彼は「断固とした意志と見解⁶²」を持った人で「自分の意見は断固として曲げず、自己不審に陥ることは全くなく、最善と考える道は決して迷うことなく進んで行こうとする⁶²」性格であったのであり、彼がそのような構えを見せている限りいまだなおその地域が持つ「古い体制」の根強い影響下にある Shepperton の community との間に軋轢が生じるのは当然のことであったであろう。そして *Adam Bede* がいろいろな魂の遍歴を経て自ら周りの人達への sympathy と generosity を獲得していったのと同様に *Amos Barton* の小説は Barton 氏の sad fortunes を描きながら、頑固者でどちらかと言えば利己的であった Barton 氏と、そしてまたまだ旧弊な Shepperton の村の者達との相互の間の sympathy と generosity を獲得していく story であると言えるのである。そしてその key-person となったのが chap.17 の最後に述べた Barton 氏の妻である Milly であった。

Milly は色白の lovely woman で、つましい衣服も豪華な dress に見まがうような品のよさと風格とを備え、その上 Hackit 夫人が「是非ともお会いしてみたいと思うようなすばらしい女性ですわ⁶³」と言っているように性格的にもやさしい Madonna (聖母) のような女性であり、さらに人をほっと安心させるような何とも言えない穏やかな雰囲気を持った人であった。

このような外見においても心ばえにおいてもまさに非の打ちどころがない妻とほっそりとのっぼで貧相に禿げ上がり生活の面でも上品さに欠け、更には職業的な才もなく貧しさの中に家族を置いて甘んじている夫との取り合わせは George Eliot の後の作品の基調を成すもの⁶⁴でそのことについて彼女は次のように言っているのである。

立身出世した見め形のよい、思慮深くそしてまた持てる才能も豊かな紳士には結婚においては最良とは言えない劣った女性でがまんしてもらいましょう。そして美しくかぐわしい女性には足つきもよくなく努力のいかにもなく失敗に終るのがせきの山で、またたいていの場合お金を稼ぐどころかひどい目に合うのがおちだというようなかawaii そうな男のための太陽となり、やわらかな枕ともなあってほしいものである。彼女——その sweet woman ——もまたそれをお望みのことで

しょう。というのは人を愛するという彼女の崇高な能力は、それだけ活動能力が広がることになるからです。そして Barton 夫人のすばらしい天使のような天性は、あなた方が彼女に見合う人としてまぶたに描かれるようなすばらしい男性——十分な収入があり個人的にも豊かな成功を収めた男性——と彼女が結婚していたとすれば半分ほども開花することができなかつたであろうと私はあえて言いたい。その上 Amos 氏はまあまあ愛情のある (affectionate) 夫であり、彼なりに妻を彼の最良の宝として大切にしていたのだ。⁵⁵

作者のこの考え方の背景には同論文の Chap.(7)⁵⁶ で見たように George Eliot の事実上の夫である Lewes が、極立って整った顔立ちで誰の目にも魅力的であった Bray や Chapman や Spencer 等々の彼女のかつての恋人達とは能力的にも外見的にも対照的であり、ape (さる) とあだ名がついていたように小男で毛深くまた素賑りが粗野でどちらかと言えば女性達に嫌われる男であったということが底流にあったようだ。さらにその上「女性の幸と不幸は彼女たちが選んだ夫次第でどうにでもなるのだ⁵⁷」という考えに立脚した彼女の小説に登場する女性の運命は、従って美人であって心ばえも優れた女性であればある程不幸が予言されるのである。Milly も George Eliot の他の小説に登場する美しい女性達の運命の例外ではなく、Barton 牧師ばかりか彼女の悲運もまた読者の涙を誘うのであるが、George Eliot の小説の中のこうした美しい女性の運命が読者の心に強い impact を与えるのはその「非の打ちどころがない」外見の陰に隠された性格的な欠点に読者が humanity を感じるからなのであって、George Eliot はこうした点にも強い配慮をしているのである⁵⁸。Milly に対しては Hackit 夫人たちの声の中には全く「非の打ちどころのない女性」という評判以外の何物もないのであるが全知全能の高みにいる作者は次のような Milly の弱点を指摘することを忘れず、村の人々の誰しもがうさん臭い目で見ているが豪華な衣服に身を包み優雅に暮らしている Czerlaski 伯爵夫人への Milly の密かな羨望を紹介している。

…Milly には一つの弱点があった——それは美しい女性なら誰でも持っている欠点なのであるから——彼女は美しい装いが好きであった。いつもの経済的な帽子などを作っている時などしばしば、本物の立派な流行品を身につけられたら——当時の婦人服には当たり前であるぴんと張った風船のようにふくらんだ袖がついた服を着ることができたらどんなにすばらしいことだろうという淡い思いの中に我身を浮かべてみるのであった。読者よ、あなた方も、私自身もそうであるが時々ばかげたことを考える弱点がありはしないであろうか。小さな手足、すりとしたしなやかな姿、大きな黒い目、黒みのかかった絹のような三つ編の髪の毛などに対する過度な賞讃といったようなものである。……伯爵夫人はそれらすべてのものを持っていて、さらに彼女はほんのちょっとだけ曲線のある優美な鼻と冴えた黒みがかかった肌をしていた。⁵⁹

そのような Milly であったから村で唯一夫の Barton 氏の教義に最高の讃辞を与え、Milly に対しても強い愛情を示してくれていたその Czerlaski 伯爵夫人を心から敬愛していたのであった。しかし Milly の伯爵夫人に対するその敬愛の情には最初から暗い影がつきまとっていたのである。つまり blood を重んじる当時の田舎の人々が Barton 氏の品のない物腰や貧相な風貌から暗示される、軽蔑のこもった真実の核を欠いた単なる憶測から「あの人のお父さんというのは非国教徒の靴屋だ⁶⁰」という gossip を Shepperton ばかりか周囲の Milby や Nebly の町に流

布させて、関心が高い Barton 氏の出生の不透明性にわかり易い解決を与えようとしたのと同じように、Milby の CampVilla という立派な屋敷を借りて一年ほど前から住んでいる Czerlaski 伯爵夫人と自称義兄の Bridmain 氏のそこに居を構えるまでの経歴と現在の二人の関係の不透明さに、当の Milby の地ばかりか Shepperton に於ても彼らについては憶測による gossip, scandal が乱れ飛んでいたのである。Shepperton の村人の gossip の力の強さについては地主の Fauquhar 氏の所を尋ねた後の Barton 氏とその様子を尋ねた Milly との会話から伺い知ることができる。

「Fauquhar 夫人は彼ら (Countess と Bridmain 氏) についての噂を全部私に話してきかせて、彼女の意見に私を同調させようとするんだよ」

「おやまあ！ みんなどうして他人のあら探しをすることにそんなにやっきになるのでしょうかねえ」

そのことについて後日 Fauquhar 氏は牧師の Ely 氏に対して次のように言っている。

「先だつてのあの晩…家内が彼らについての近所の人々の一般的な見解を Barton さんに話していたのです。するとあの人は真赤になって怒ったのですよ。驚くじゃありませんか。自称伯爵夫人の夫がポーランド人ですごい脱走をしたとかという話を全部信じ込んでしまってるんですよ。夫人のことはですな、まあ何と完全無欠なことだの、最も洗練された感覚の持ち主だの美点をあげれば枚挙にいとまがないほどだとか思ってるんですから…家内は Barton 夫人があんな女とつき合ったらやっかいなことになると思ってそれであえて Barton さんにお話したのですよ。でもあんな頑固もんにゃ何を言っても無駄だつて私しゃ言ってやりましたよ」⁶¹⁾

つまり伯爵夫人に対する gossip は Czerlaski 伯爵夫人の場合にはそこに隠された真実はないもののその初端においては、*Middlemarch* において「うさん臭さ」を感じ取った町の人々の中に沸き上がった Bulstrode への gossip, scandal と同じ類のものであって、Barton 氏も Milly も、そのようなものにはいっこうに構わず純粋な気持で Bulstrode に近付いて行ったにもかかわらず遂には同じ穴のむじなとみなされ Bulstrode と同様のそしりを受けた Lydgate と同じ立場に立っているのである。とにかく当時の地方の田舎の者たちは、外部からの流入者であるという事実だけで彼らによって地域の既存の規範が壊されていくような恐れを感じる上に、なぜこの地に住むようになったのかということへのきちんとした理由付けのない者達の背後に感じる「うさん臭さ」を殊の他嫌悪したのであった。そしてその嫌悪はまたその「うさん臭さ」の背後に彼らを感じる非道徳的な罪の臭いに端を発していたのである。しかし *Middlemarch* の人々が偽善的な Bulstrode に感じた彼の過去にある「うさん臭さ」に道徳上の罪が実際に存在していたのとは異なり、Czerlaski 伯爵夫人に対する gossip について George Eliot は自身の言葉で次のように言っている。

Milby の立派な人々が Czerlaski 伯爵夫人についての真相を知ったとしたら自分たちが想像していたような悪いものが何もないことにさぞかしがっかりするに違いない。……実際には褐色や青や緑色の独特の陰影があるのにそれを識別することなしにこれは黒であると言い切ってしまうのははるかに容易なことである。あなたの隣人に対しても何の役にも立たない人だと決めつけてしまうことは、その考えを訂正しなければならないような詳細な事柄に立ち入ることよりもはるかに容易なことなのだ。ましてや伯爵夫人は全くもっていかがわしい人だとする基本的な立場にの

み立脚して、その前提がこわれることにでもなったらひっくり返され全く無に等しくなってしまうような高德者ぶった供述や鋭い観察のことを思ってもみて下さい。銀行家の妻の Phipps 夫人と弁護士の子の Landor 夫人は、Bridmain 氏は伯爵夫人の兄ではないという推測に観察眼の鋭さにかけては定評のある威信にさらに一矢を報いようとしていた。さらに Philips 嬢はもし伯爵夫人がそれほどのいかがわしい人でなかったとしたら、個人的な魅力にかけて卓越しているのは明白であるあの夫人に見合うだけの道徳的な優越を、自分自身は何も持っていないことに気付いていた。とすれば Philips 嬢の太くてずんぐりした姿と全く不似合いな洋服は頭上に後光をいただいて徳の高みから見下すことができなくなって、Czerlaski 伯爵夫人の Diana のような姿と洗練された優美な洋服と同じ水準の同じ光の中で見られることになるのである。それから伯爵夫人が厳密な意味でのれっきとした社会から締め出されねばならないような犯罪をほんとうに犯した訳ではないことを知らされたら、Milby の紳士達が酒を飲みながらおもしろおかしく言い合ったあてこすりはことごとく裏をかかれ、味もそっけもなくなってしまうことであろう。⁶²

しかし伯爵夫人はまごうかたなき没落した後に早世した Czerlaski 伯爵の妻であったのであり、同居している Bridmain 氏は正真正銘の彼女の片親違いの兄であって事業で成功しその 40 歳そこその年齢にもかかわらず自分が成した財産で義妹の散財を補い Milby の高価な貸別荘で二人して優雅な暮らしをしているというその事の真実は、夫人が 30 歳にも満たない「Diana のような」麗人であったことから関心が高まった読者にだけは作者によって明らかにされたものの、gossip や scandal をかき立てている Shepperton や Milby の住民の中ではその事の真実を証明する事件は何も起らないまま、自称「兄」という人と最近村に移住してきた妙齡の麗人である伯爵夫人の周りにつきまとう「うさん臭さ」は、遂には夫人を Milby から Shepperton からも締め出してしまったばかりか Barton 一家にも恐しい悲劇をもたらすことになったのである。伯爵夫人と Barton 牧師夫妻との親交は先にも少し触れたように、伯爵夫人に対する gossip や scandal、冷笑や無視という周辺住民の彼女への冷遇の中で Barton 氏夫妻だけが彼女の宗教的な関心の深さを賛嘆し夫人と Bridmain 氏の人柄に深い信頼を置いていたということと、それとは逆に伯爵夫人だけが Barton 氏の教義に学問的評価を与えていたということ、また伯爵夫人と Milly との間にお互いの深い敬愛の情が育っていたこと等々によるものであった。しかし Middlemarch で gossip と scandal にまみれていた Bulstrode の慈善事業にそれとは知らず純粋な気持で加わった青年医師の Lydgate がそのような Bulstrode に組したが故に悲惨な結末を迎えたことや、また上記の引用文の George Eliot 自身の言葉から感じられる一たんわき上ってしまった gossip, scandal の持つなかなか撤回されることのない執拗な強い力という観点からすれば、先に引用した地主 Fauquhar 氏がした、伯爵夫人と今まで通りのつき合いを続けていたら「やっかいなことになる⁶³」からやめるようにという Barton 氏への忠告は、Shepperton に来てまだ二年余りしかたっていないその evil speaking の恐ろしさを十分に知らない Barton 氏自身はそれを不当なものとしてにべもなくはねつけたのではあったが、その地の「古くからある生活の規範」を十分に知りその地における gossip, scandal の威力への恐れを十分に知っている Fauquhar 氏ならではの Barton 氏に対するととても親切な助言であったのかもしれない。

注

- (1) 上田女子短期大学紀要 20 号 (1997 年 3 月刊) の *Middlemarch* [I. Dorothea の Mr. Casaubon との結婚における過ちについて] において筆者は Dorothea と Casaubon 氏との結婚の挫折の背後に見られる Shakespeare 4 大悲劇の一つである *Othello* の中における Venice の貴族の娘 Desdemona と軍人 Othello との結婚の悲劇の陰について述べ、また当学紀要 23 号 (2000 年 3 月刊) に発表しである『Lydgate の人生における理想の挫折について』でも筆者は Lydgate と Rosamond との結婚に対してそれと同様の陰を見い出している論文を掲げている。
- (2) 上田女子短期大学紀要 28 号：2005 年 3 月刊
- (3) *Macbeth* では第一幕等一場に登場する妖婆の予言に奔弄される Macbeth の運命が描かれ、また *Hamlet* では亡き父王の亡霊の言葉の真実の暗示に Hamlet 自身苦しむ drama であるし、また *Othello* でも第一幕第一場での Iago と Roderigo の会話の中に劇全体の方向付けが成されているのである。
- (4) Dorothea の婚約披露 party には、壮大なスケールで展開する *Middlemarch* の小説の冒頭にふさわしく一応地位のある多くの人が出席しているが保守的な当時の *Middlemarch* の医学界に批判的な Bulstrode とそこにやってきたばかりの新進気鋭の青年医師 Lydgate との癒着の暗示がそこにはすでに見られるのである。
- (5) *George Eliot a Literary Life* by Kerry Mc Sweeney (1991, Antony Rowe Ltd, Great Britain) p39
- (6) Ibid. P1
- (7) Ibid. P39
- (8) 上田女子短期大学紀要 25 号；2001 年 12 月刊
- (9) 上田女子短期大学紀要 27 号；2004 年 1 月
- (10) Conte : Auguste Conte ; フランスの哲学者。科学の進歩は神学的・形而上学的・実証的の 3 段階にわたるとし、実証的な社会学を創始。「実証哲学講義」「実証政治体系」(1798-1857)
- (11) 「サイラスマーナー」(岩波文庫 土井治訳、1988 年) 解説
- (12) *Felix Holt* ; by George Eliot, 1866
- (13) *Felix Holt the Radical* (Everyman's Library) chap. 3
- (14) *The English Novel* (Walter Allen, Penquin Books) P-221
- (15) *George Eliot a Literary Life*, P7
- (16) Ibid.
- (17) Ibid. P5
- (18) *Westminster Review* ; London において Chapman によって発刊されていた季刊紙。1849 年以降 Marian が副主筆となり、衰退の一途にあったのを立てなおすことに成功した。
- (19) Wordsworth : Willam Wordsworth ; イギリスの桂冠詩人。湖畔詩人の一人で Coleridge との共同出版「抒情歌謡集」は汎神論的な自然観照をうたいロマン主義の一時期を画した。(1770-1850)
- (20) Virgil : ローマの詩人。*The Aeneid* の作者(70-19B・C.)、*Aeneid* 第 4 巻の 173 行から 195 行の間にイーニアスとカルタゴの女王ダイドーとの恋愛の噂が、いかにすみやかに尾ひれをつけて世間に伝わっていったかが物語られている。
- (21) George Eliot は Chap. 5 で伯爵夫人が Barton 氏の牧師館に転がりこんできたことから起った gossip, scandal に *Aeneid* の中のこの場面を言及している。
- (22) 当学紀要 27 号の当論文 Chap. 12 参照

- (23) 1830 年当時の牧師はほとんどすべて Oxford 大学か Cambridge の大学の出身者であった。
- (24) Barton 氏は Shepperton のような田舎の人々の level に合った説教はできなかったが神学の専門誌にその教義が取り上げられた事実からして学問的にはかなり力があつたと思われる。
- (25) *George Eliot a Literary Life* P7
- (26) 高教会 低教会 ; High church, Low church ; 英国国教会 (Anglican Church) の 2 つの分派。低教会は古くからの Anglican church の protestant であつた。当学紀要 28 号同論文 Chap. 12 参照
- (27) *Amos Barton* by George Eliot, Chap. 2
- (28) 当学紀要 28 号同 title の論文の Chap. 15
- (29) *Mr. Gilfil's Love Story* by George Eliot, chap. 1
- (30) *Amos Barton*, chap. 1
- (31) Ibid.
- (32) Ibid.
- (33) Ibid. chap. 2
- (34) Ibid.
- (35) Ibid. chap. 1
- (36) *Mr. Gilfil's Love Story*, chap. 1
- (37) Ibid. Shepperton, ...was in a state of Atica culture compared with Knebly. 当学紀要 28 号同論文 chap. 14 参照
- (38) *Amos Barton*, chap. 2
- (39) *George Eliot and Her Morality* ; 富士川和男、昭和 53 年 2 月 (大成堂書店) p.25
- (40) *Amos Barton*, chap. 1
- (41) *Adam Bede* by George Eliot, 1860, *Amos Barton* と *Mr. Gilfil's Love-Story* と *Janet's Repentance* の三つの話が収められている *Scenes of Clerical Life* (1856) の次に出版された小説
- (42) Methodist ; Protestant の一派、1729 年 Wesley らが Oxford で起した敬虔主義的運動
- (43) 当学紀要 27 号同論文 chap. 12 参照
- (44) *Amos Barton*, chap. 1
- (45) Ibid. chap. 2
- (46) Ibid.
- (47) Ibid.
- (48) Ibid.
- (49) Ibid.
- (50) Ibid.
- (51) Ibid. chap. 3
- (52) Ibid. chap. 2
- (53) Ibid. chap. 1
- (54) *Middlemarch* の Dorothea と Ladislaw, *Felix Holt* の Esther と Felix, *Adam Bede* の Hetty と Adam 等
- (55) *Amos Barton*, chap. 2
- (56) 同学紀要 27 号
- (57) *Felix Holt, the Radical* 当学紀要 11 号「*Adam Bede* にみる George Eliot の女性観について」参照

(58) 外見的にも美しく、克己的で性格的にも全く申し分のない *Adam Bede* の Methodist の女説教師 Dinah Morris は卓越した非人間的な個性である故に、虚栄に満ち欠点だらけの農民の娘である Hetty Sorrel に比べて読者は Humanity も Sympathy も感じることは少ない。

(59) *Amos Barton*, chap. 3

(60) Ibid.

(61) Ibid.

(62) Ibid. chap. 4

(63) Ibid. chap. 3